

## 資 料

# コロナ禍でも学生が臨地をイメージできる老年看護学実習Ⅱの工夫

永田文子 岡本あゆみ 辻育恵

淑徳大学看護栄養学部

## Inclusion of remote practical training in gerontological nursing II to simulate clinical practice for students during the COVID-19 pandemic

Ayako Nagata, Ayumi Okamoto, Ikue Tsuji  
School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

### 要旨

2020年度の老年看護学実習Ⅱは、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、臨地で実習をすることはできなかった。そのため、コロナ禍でも学生が臨地をイメージできるように、実習目的・目標は大幅に変更せずに工夫を行った。工夫した点は大きく三つである。一つ目は実習施設と遠隔ツールを用いた実習をしたことである。事前に教員が施設の受け持ち高齢者の情報を得て、学生に提示し、紙面上の情報のみでなく高齢者と直接コミュニケーションをとり情報を得る機会を設け、ケアプランの一部を実施した。二つ目は遠隔ツールを通して実習指導者の参加と助言を得る機会を設定したことである。全ての施設ではないが、施設オリエンテーション、学生が立案したケアプラン、レクリエーション、最終カンファレンスと4日間接続して助言を受けた。三つ目は高齢者への援助方法を紹介した動画を作成したことである。高齢者への援助は、体調に応じながら本人の持っている力を活かすことや尊厳に配慮することを基本とする。そのため、臨地の実際の場面をイメージできるような援助動画を作成し学生に提供した。今後は高齢者への看護技術を体験できる演習も組み合わせる必要があると考えている。

**キーワード：**老年看護学、遠隔実習、コロナ禍

**Key Words:** gerontological nursing, remote practical training, COVID-19 pandemic

## I. はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19とする）によるパンデミックは、看護学生の実習に影響を及ぼした。アメリカ合衆国の多くのコミュニティでは、防護具の不足やCOVID-19の蔓延への不安等を考慮して医療機関や施設で看護学生の実習受け入れを中止した。実習機会の減少のため、学生へのシミュレーション教育の増加、遠隔医療への配置、外来実習への切り替えなどが報告されている（Chan, 2021）。

千葉県では2020年4月に緊急事態宣言が発出された。その約半年後の日本看護系大学協議会の調

査では、COVID-19により変更となった実習開講科目は83.4%あり、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、母性看護学、小児看護学、精神看護学、在宅看護学、看護の統合と実践、助産学実習、公衆衛生看護学実習のうち、老年看護学は3番目に変更が多い領域だった（日本看護系大学協議会, 2021）。看護系大学の老年看護学実習に関する報告をみると、コロナ禍前は病院のみ（黒河内, 2022）、病院と介護保険施設（前原, 2021; 成澤, 2021; 池俣, 2022）、病院と通所サービスを含む介護保険施設（山崎, 2021）、介護予防事業と介護保険施設（内野&堀之内, 2021）など様々な場所で実習を実施していた。COVID-19の影響で病院

実習の日数を短縮した大学もあるが(成澤, 2021; 黒河内, 2022)、多くは遠隔実習や学内実習に変更していた(池俣, 2022; 前原, 2021; 内野&堀之内, 2021; 山崎, 2021)。変更後の実習内容は、既製のDVDを教材(山内, 2022)とした一方で、患者の日常生活場面の動画を作成し看護過程を展開(前原, 2021)、介護老人保健施設で生活する高齢者と学生のコミュニケーション場面の動画を作成し対応方法を検討(池俣, 2022)など、独自に教材を作成・利用した報告もみられた。内野ら(2021)は遠隔ツールのZoom®を接続して介護保険施設の高齢者と対話をした報告をしているが、当学科の老年看護学実習Ⅱは独自に教材を作成し、かつZoom®を接続して高齢者と対話するのみでなく、ケアプランの一部を実施した。そのため、本稿では2020年度以降に実施したコロナ禍でも臨地をイメージできる工夫を報告する。なお、臨地実習アンケートの結果の使用については、淑徳大学看護栄養学部研究倫理審査委員会の承認(N22-03)を得ている。

## Ⅱ. 報告

### 1. 実習内容の変更について

当学科の老年看護学実習Ⅱは2単位で、実習目的・目標は表1に示すとおりである。約100名の学生を8つのグループに分けて3年次後学期に実

施している。これまでは学内で2日間、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅(以下、施設とする)で8日間の実習をしてきた。

2020年7月以降、臨地での受け入れ中止の連絡が入った。また、ソーシャルディスタンスを保証する教室の少なさ、大学用バスの定員制限、学内での感染リスク等があり学内実習も困難であったため、遠隔実習が必要になった。臨地をイメージできる工夫をした結果、実習目的・目標は大きく変更する必要はなかった。表2に従来の臨地実習と2020年度、2021年度の実習のスケジュールを示す。

## 2. 臨地をイメージできる工夫

### 1) 遠隔ツールを用いた実習の実施

#### (1) 情報収集について

事前に教員が施設の受け持ち高齢者の情報を得て学生に提示した。紙面上の情報のみでなく、高齢者とオンラインで直接コミュニケーションをとり情報を得る機会を設けた。当学科の実習では、高齢者は加齢による聴力機能低下や、脳血管疾患、認知機能障害等によるコミュニケーション障害があるため、スケッチブックをコミュニケーションツールとして利用してきた(岡本, 2022)。2019年度の実習でスケッチブックを活用した4年次生

表1 老年看護学実習Ⅱの実習の目的、実習の目標

#### 【実習の目的】

高齢者を包括的にとらえ、その人らしくいきいきとした生活ができるよう健康上の課題をアセスメントするとともに、高齢者、家族、生活環境をとりまくヘルスケアシステムの理解を深め、看護の役割および老年看護の基本的実践能力を養う。

#### 【実習の目標】

1. 受け持ち高齢者の身体的・精神的・社会的特徴をとらえることができる。
2. 受け持ち高齢者の特性を把握し、状態に合わせてより良いコミュニケーションをとることができる。
3. 受け持ち高齢者のライフストーリーや価値観等の個別性をふまえて高齢者自身の強み(ストレングス: 背景をふまえた乗り越える力)を見出し活用することで、本人にとっての健康や生活の質の向上に向けて、ICFモデルを活用した包括的な視点からケアを展開することができる。
4. 入所(入居)する高齢者の健康の段階をふまえた看護の重要性について理解できる。
5. 高齢者とその家族を取り巻くヘルスケアシステムにおけるチームケアを通して、多職種連携の重要性と看護職の役割について理解できる。
6. 高齢者と家族が必要としている社会資源を理解できる
7. 高齢者に対する考えを深め、高齢者やその周囲を尊重する態度に関わることができる。
8. 看護学生として誠意・責任・向上心を持ち、自らの健康管理を適切に行い、入所(入居)高齢者に対して安全かつ積極的に実習に臨むことができる。

表2 従来の臨地実習と2020年度、2021年度の遠隔実習のスケジュール

日 程	コロナ禍前の 臨地実習		2020年度、2021年度の遠隔実習		
			ケアプラン作成 レクリエーション企画  大学アカウントのZoomと <i>Google Classroom</i> の共有 アプリケーションを使用	共有・実施・発表(以 下の何れかを実施)  ・施設とオンライン ・施設とオンデマン ドまたは作成文書の 共有およびグループ 内共有	閲覧動画
1日目	学内で実習オリエン テーション 基本的な技術演習		実習オリエンテーション		
2日目	臨地 で 実習	施設オリエン テーション、 受け持ち高齢 者紹介・挨拶	受け持ち利用者の情報を 得て、ケアプランを個人 で作成	施設オリエンテーシ ョン 受け持ち利用者とコ ミュニケーション、 情報収集	高齢者との挨拶、 自己紹介(スケッチブ ック使用)
3日目		ケアの見学・ 実施、ケアプラ ン・レクリエーシ ョン等の企画 書立案			ベッド⇄車椅子の移 乗介助 テーブル席での移動 介助 エレベーター乗車 のための移動介助
4日目					トイレでの排泄介助 ベッド上おむつ交換
4または 5日目		中間カンファ レンス	個人ケアプラン発表、同 一受け持ち利用者のグル ープでケアプランを統合	統合されたケアプラ ンをグループ内や実 習指導者へ発表	
6日目		修正したケア プランにそつ てケアの提供、 集団レクリエ ーション等の 実施	グループでレクリエーシ ョン企画書作成		アクティビティ・ケ ア①(紙芝居、歌詞カ ード、石けんデコパ ージュ)
7日目			レクリエーション動画撮 影・編集		アクティビティ・ケ ア②(牛乳パック遊び)
8日目					
8または 9日目		最終カンファ レンス(施設 実習での学び)	レクリエーション実施の 振り返り(グループ・個人)	リアルタイム接続も しくはオンデマン ドでレクリエーション 実施	
10日目	学内で実習の学びの まとめと共有		実習での学びを個人で発 表し、グループで学びの 統合を作成	グループで統合した 実習の学びを発表	

の協力を得て、スケッチブックの作成意図や利用方法の理解を促すための動画を作成した。学生はその動画を視聴してスケッチブックを作成し、実習初日もしくは2日目に学生の自己紹介をしながら高齢者とコミュニケーションをとり、好みや関心などについて情報を得た。

## (2) ケアプランについて

当実習では10年以上前から、International Classification of Functioning, Disability and Health (国際生活機能分類)に健康状態を加えた生活機能モデル(以下、ICFモデルとする)を活用している(図1)。介護報酬では、科学的介護情報システムとしてケア(サービス)の目標や計画(プログ

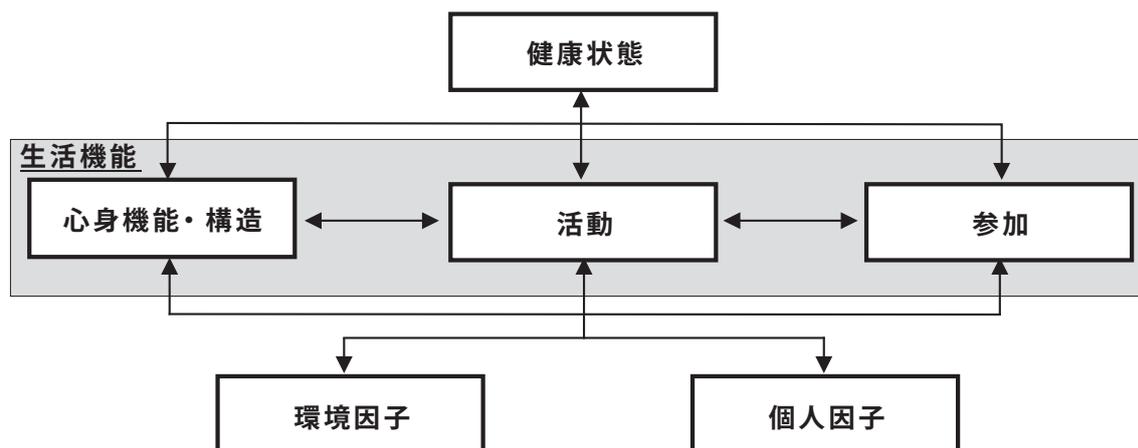


図1 ICFモデル

ICFモデルは「心身機能・構造」「活動」「参加」を生活機能とし、背景因子である「環境因子」「個人因子」も加わり、それぞれの因子間、および「健康状態」に相互に関連する、人が生きることを包括的に捉える概念である

ラム)等をICFに分類しコードに紐づけて提出するものとして活用されており、多職種等で共通理解・共有をはかるものである。学生はICFモデルを活用しながら、高齢者の治らない疾患や障害をふまえて、できないことをできるようにする問題解決型思考ではなく、高齢者が望む生活や状態像を目標とする目標志向型思考でケアプランを立案する。高齢者の目標は、通常は「健康管理」と「Quality of life (以下、QOLとする)」に関するケアプランを立案する。

オンラインで直接または間接的に接続した時に、QOLに関するケアプランの一部としてレクリエーションの実施が可能と考えた。学生は個人または集団へのレクリエーションの企画書を作成し、実習指導者の確認・許可を得たうえでレクリエーションを実施した。施設や感染状況などのタイミングによって実施方法は以下の3種類となった。  
①Zoom®を接続してリアルタイムでレクリエーションを実施する(一部オンデマンド動画の使用と併用)、②オンデマンド動画を高齢者が見ている様子を、教員や実習指導者がZoom®で学生へ中継する、③オンデマンド動画を高齢者に見てもらい、その反応を実習指導者が録画した動画を学生に見せる、もしくは動画撮影はせずに反応を教える、であった。

学生は高齢者の反応を直接見る、もしくは間接的に反応をとらえることができたため、QOLに関

するケアプランの結果を得て振り返り、評価することができた。

## 2) 遠隔実習への施設の实習指導者の参加

表2の2020年度、2021年度の遠隔実習のうち「共有・実施・発表(以下の何れかを実施)」で示したように、実習指導者の参加は4日間設けられた施設もあった。

実習初日もしくは2日目に実習指導者から施設オリエンテーションを受けた。実習指導者は教員のタブレット端末でZoom®を接続したまま施設内を移動し、高齢者が日中を多く過ごすデイルーム、季節を感じる装飾、病院よりも広い居室やトイレ、風呂場などを案内した。リアルタイムの接続が難しい施設は事前に教員もしくは実習指導者が撮影をした施設内の動画を学生に見せ、病院と異なる施設環境をイメージできるようにした。Zoom®接続のために教員が施設に出向いたが、COVID-19の感染状況が悪化すると教員も施設内に入らず、実習指導者と施設の事務職員にパソコンの設定とZoom®接続を依頼した。

従来の臨地実習では中間カンファレンスとして立案したケアプランについて実習指導者から助言を受け、また最終カンファレンスを実施していたため、遠隔実習においてもできる限りオンラインで助言を得た。ケアプランは個々の学生が立案したが、実習指導者へ発表する場合は学生のグループで統合し、助言を受けた。

### 3) 高齢者への援助方法を紹介した動画の作成

高齢者への援助は、体調に応じながら本人の持っている力を活かすことや尊厳に配慮することを基本とする。そのため、臨地で実習できなくとも実際の場面をイメージできるような援助方法を紹介した動画を作成した(表3)。看護技術に関する既製の動画の多くは全介助であり、高齢者の力を活かしている動画は見当たらなかった。そのため、高齢者の力を活かしたベッドから車椅子への移乗、

トイレでの排泄介助、入浴介助、レクリエーションで活用できる動画などを作成した(①~⑭)。特に、歌や音楽を使用したレクリエーション等においては、学生は企画書通りに参加してもらおうとする傾向に陥りやすいため、楽しさを演出するハンドベルの演奏動画(⑮)を作成した。また、学生は高齢者の認知機能低下への配慮が難しく、人によっては不快さを感じるクイズを作成するため、知識に関係なく楽しめるようなクイズ動画(⑯)

表3 作成した動画とその意図・内容

作成動画	動画の意図・内容	時間
① 高齢者との挨拶	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加齢による視野障害や、認知機能障害がある高齢者に対する声の掛け方</li> <li>・スケッチブックを使用したリアリティオリエンテーションや挨拶</li> </ul>	2分
② スケッチブックを使った自己紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スケッチブックを活用した場合の効果</li> <li>・高齢者に、スケッチブックによる視覚的に補完</li> </ul>	14分
③ ベッド⇔車椅子の移乗援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者のセルフケアを支える援助</li> <li>・高齢者や援助者がおこしやすい事故とその予防方法</li> <li>・居室を退出する前の環境整備</li> <li>・足の観察と注意点要介護の高齢者に特徴的なシーティング方法</li> </ul>	10分
④ テーブル席の移動援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象者および周囲の人の安全も守る</li> </ul>	2分
⑤ エレベーターでの移動援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・エレベーターの使用状況に合わせた援助方法</li> <li>・エレベーターへの安全な乗降援助方法</li> </ul>	2分
⑥ トイレでの排泄援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活のリズムにあわせた支援</li> <li>・トイレへの安全な出入り方法</li> <li>・麻痺などの障害にあわせた場所の選択</li> <li>・高齢者のセルフケアと安全と尊厳を支える援助</li> <li>・腹部に疾患がある高齢者がいるため、腹部マッサージは医師の許可が必要</li> <li>・排泄物の観察をしてから流すこと、終了後に手洗いをすること</li> </ul>	12分
⑦ ベッド上でのおむつ交換	<ul style="list-style-type: none"> <li>・尊厳に配慮して声をかけ、高齢者の許可を得る</li> <li>・脆弱性に合わせた援助方法</li> </ul>	6分
⑧ 入浴介助(シャワー浴・足浴)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入浴前の確認について</li> <li>・セルフケアと安全と尊厳を支える援助</li> <li>・皮膚の脆弱性に合わせた支援</li> </ul>	15分
⑨ 入浴介助(機械浴)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特殊浴槽の場合の、セルフケアと安全と尊厳を支える援助</li> </ul>	5分
⑩ 水分摂取支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高齢者の水分摂取支援の必要性</li> <li>・水分摂取を促進することが期待される方法の紹介</li> </ul>	6分
⑪ レクリエーションへの図書紹介	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの実習で高齢者に好評だった、図書室から入手可能な本や紙芝居の紹介</li> </ul>	26分
⑫ 歌詞カードの作り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一緒に作る過程を楽しむ作成方法</li> </ul>	3分
⑬ 石けんデコパージュ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・石けんデコパージュを高齢者と一緒に楽しむ方法</li> </ul>	10分
⑭ 牛乳パック遊び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・牛乳パックを加工し遊びの工夫</li> </ul>	7分
⑮ ハンドベル演奏	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しいハンドベル演奏例</li> </ul>	6分
⑯ シュート対決	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症に配慮した知識を問わないクイズ例</li> </ul>	3分

も加えた。

そして、動画の視聴後に、受け持ち高齢者に対する援助について具体的に記載することで、ケアプランにつながる内容を検討し、教員からの助言を得る機会とした。

### 3. 遠隔実習における個人情報の保護

当学科の臨地実習要項ではパソコン、携帯電話などの電子媒体は原則使用禁止であるが「教員の許可があった場合はこの限りではない」としている。実習記録の作成にあたり、実習施設に下記を提示および学生が署名した誓約書を提出し、許可を得た上で遠隔実習を行った。なお、学生に電子媒体の利用は実習施設の許可を得て特別に実施しており、正規の規定外のルールであることを繰り返し説明した。

1) Google Classroom®とZoom®を使用したため、原則としてセキュリティ対策ソフトで安全性が担保されているデバイスを用い、配信内容やディスカッション内容が他に漏れない自宅または大学内の指定した場所で遠隔実習に参加した。そのため実習初日にセキュリティ対策ソフトをインストールの有無を学生に確認し、インストールしていない場合は、お試し版のソフトをインストールしてもらった。

2) 高齢者の情報は、学生に提示する際は個人が特定できないように教員が加工した。また、Google Classroom®で高齢者の情報をPDFファイルで提示し、学生に印刷、ダウンロード権限を付与せず、実習期間終了後はファイルを削除した。

3) 個別、またはグループで作成するケアプラン、レクリエーションの企画書、実習の学び等は、Google ドキュメント®を教員が配信し、学生が入力した。配信するとドキュメントのオーナーは一旦学生になるが、提出するとオーナーは教員に戻る。そのため、オーナーが学生のままで実習期間が終わらないように、提出期限を決めて、提出がない場合は学生に連絡をした。その後、実習期間終了後には学生がアクセスできないようにドキュメントを保護した。

### 4. 遠隔実習の評価（臨地実習アンケート）

臨地実習アンケートは、老年看護学実習Ⅱが終了した日に学生が5点満点で評価するものである。従来実習の2019年度、全ての学生が遠隔実習の2020年度、約1/3の学生が臨地実習で2/3が遠隔実習だった2021年度の結果を表4に示した。「施設の指導者から適切な指導・援助を受けることができた」「あなた自身、興味・関心をもって積極的に

表4 学生による臨地実習アンケート結果（老年看護学実習Ⅱのみ抜粋）

	2019年度	2020年度	2021年度
アンケート回収率	74.7%	68.7%	84.2%
実習オリエンテーションは、実習に役立った	4.2	4.3	4.5
実習での課題（記録・レポートなど）は、実習目標を達成するために役立った	4.1	4.4	4.7
担当教員から適切な指導・援助を受けることができた	4.3	4.4	4.7
施設の指導者から適切な指導・援助を受けることができた	4.3	4.4	4.6
あなた自身、興味・関心をもって積極的に実習に取り組んだ	4.6	4.6	4.7
実習場所の環境は良かった（物品、カンファレンスルーム、ロッカー、休憩室など）	4.4	4.1	4.6
実習場所の受け入れ体制は良かった	4.6	4.4	4.7
この実習に対するあなたの満足度とその理由を教えてください	4.4	4.3	4.6

①2019年度（令和元年度）（前・後学期）ファカルティ・ディベロップメント成果報告書（FD活動編）

②2020年度（令和元年度）（前・後学期）ファカルティ・ディベロップメント成果報告書（FD活動編）

③2021年度（令和元年度）（前・後学期）ファカルティ・ディベロップメント成果報告書（FD活動編）を一部抜粋し統合、回収率以外は5点満点の平均値

に実習に取り組んだ」「この実習に対するあなたの満足度とその理由を教えてください」は、2019年度と2020年度で大きな変化はみられなかった。しかし、臨地をイメージできたか、について直接学生に聞いておらず、独自に質問項目を設けるべきであった。

## 5. まとめ

2020年度はコロナ禍のため全ての実習施設で臨地での受け入れがされなかったが、実習目的・目標を大きく変更することなく臨地をイメージできる工夫として、遠隔ツールを用いた臨地とのつながりやケアの実践、実習指導者の指導、高齢者への援助方法の動画閲覧とその振り返りが行えたことで、従来の臨地実習と大差ない学生の評価になっていたのではないかと考えた。既製のケア技術に関する動画は全介助が多く高齢者の持てる力を活かしたものでなかったため、学生の受け持ち高齢者にあわせて具体的にケア方法を考えられるように16本の動画作成に至った。

教員の主観では、受け持ち高齢者のケアプランを学生が個々で立案し、その後同一の受け持ち学生同士で統合するディスカッションのなかで、他の学生の意見から自分と違う視点を得て、学びを深めることができていたように感じられた。また、従来の臨地実習に比べると学生の疲労が少ないように感じた。これらは、遠隔実習のため実習施設へ通う必要なかったため時間に余裕ができたためかもしれない。しかし、これらについては、客観的な指標となる学生の評価の分析が必要と考える。

感染予防の目的で学内実習はできなかったため、高齢者への看護技術の体験や演習はできなかった。そのため、動画視聴からの学びをふまえて受け持ち高齢者への支援を頭の中でシミュレーションはできたと考えるが、実際に実践できるかどうかは今回判断できない。例えば、片麻痺があって尿意や便意がなくても介助でトイレに座ることが可能ならば、ベッド上ではなくトイレでの排泄介助を行うが、安全にかつ安楽に介助することは簡単ではない。従って、今後もこのような遠隔実習の場合は、演習も組み合わせる必要があると考える。

## 文献

- Chan G.K., Bitton J.R., Allgeyer R.L., et al. (2021). The Impact of COVID-19 on the Nursing Workforce: A National Overview. *Online Journal of Issues in Nursing*, 26(2), N.PAG-N.PAG.
- 池俣志帆, 坂恒彦, 堀口久子, 他 (2022). 新型コロナウイルス感染症に伴う介護老人保健施設実習の実践内容と課題. *椋山女学園大学看護学研究*, 14, 47-52.
- 北川公子 (2020). 老年看護の役割. 北川公子 (編), *系統看護学講座専門分野II 老年看護学 (73-78)*. 東京, 医学書院.
- 黒河内仙奈, 間瀬由記, 安藤里恵 (2022). コロナ禍においてオンラインシステムを導入した高齢者看護学実習の評価と課題 学生による事後アンケートの分析から. *神奈川県立保健福祉大学誌*, 19(1), 95-109.
- 前原なおみ, 堂本司, 千田昌子, 他 (2021). ICTを活用した遠隔実習の取り組み コロナ禍での老年看護学実習の展開. *京都看護*, 5, 55-62.
- 成澤健, 沢田淳子, 徳永しほ, 他. (2021). コロナ禍における老年看護学実習プログラムの有用性の検討. *宮城大学研究ジャーナル*, 1(2), 133-141.
- 日本看護系大学協議会 (2021年4月). 日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会2020年度COVID-19に伴う看護学実習への影響調査 A調査・B調査報告書. 令和4年8月18日アクセス. <https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf>
- 岡本あゆみ, 永田文子, 辻育恵, 他 (2022). スケッチブックを取り入れた高齢者とのコミュニケーションにおける学生の学び. 第42回日本看護科学学会学術集会, Web発表.
- 内野良子, 堀之内若名 (2021). 【COVID-19と教育の新たな試み】2020年度高齢者看護学実習Iを振り返って. *東都大学紀要*, 11(1), 137-145.
- 山崎尚美, 杉本多加子, 上仲久, 他 (2021). 感染予防に留意した新しい実習方法のあり方 Open CEASを活用した老年看護学オンライン実習の展開例. *畿央大学紀要*, 18(1), 79-87.
- 山内佐紀, 塩霧都恵, 福田恵子, 他 (2022). オン

ラインを活かした老年看護学実習Ⅱのメリットについて 2020年度の老年看護学実習Ⅱの学生アン

ケート結果からの改善を試みて. 兵庫大学論集 (27-28), 153-160.